

転生皇女は
冷酷皇帝陛下に溺愛されるが
夢は冒険者です！

4

akechi Illustrator
柴崎ありすけ

登場人物紹介

ウロボロス

魔国で崇められている
邪悪竜。アリアナの悪戯に
苦しめられてきた。

ゼスト

竜族の族長で、アリアナの
育ての父。アレクシアからは
「じいじ」と呼ばれている。

デズモンド

魔国の王で、アリアナの
元恋人。今世でも
アレクシアの婚約者に。

ルシアード

アウラード大帝国の皇帝。
冷酷で他人への情を持たないが、
アレクシアに出会って変わっていく。

エレノア

アウラード大帝国の公爵。
アレクシアの命を狙う黒幕として
疑われている女傑。

アレクシア

アウラード大帝国の第四皇女で、
大賢者アリアナの生まれ変わり。
明るくマイペースで悪戯好き。

白玉

黒蜜

ケルベロス

(みたらし、きなこ、
あんこ)

第一章 アウラード大帝国の闇^{やみ}

1 アレクシアのこれまでの活躍

アウラード大帝国の第四皇女として生まれたアレクシア・フォン・アウラードは、実は四百年前に実在した大賢者アリアナの生まれ変わりだった。

ところがアレクシアは、生まれてすぐに実母であるスーザン第三側妃に、森へ捨てられてしまう。そんな逆境にもめげずに、大賢者として数々の修羅場^{しゅらば}を乗り越えてきた前世の経験や、前世から引き継がれた強大な魔力を活かして、アレクシアは赤子ながらも一人逞しく^{たくま}生き延びてきた。

そんな過酷な生活のなか、三歳になった頃に、父親であるアウラード大帝国皇帝のルシアードと出会う。

彼は冷酷^{れいこ}な人格破綻者として有名だったが、自分に対して臆^{おそ}することなく堂々と接してくるアレクシアに興味を持ち始め、一緒に暮らし始める。

父娘は協力して、悪事を働く皇妃や側妃を一掃しながら、母方の祖父であるローランド・キネガー公爵や伯父であるロイン、異母兄姉と出会い親交を深めていった。

また、前世で従魔だった、フェンリルの幼体である白玉、ガルムの幼体である黒蜜、そしてケルベロスのみたらし、きなこ、あんこの三兄弟とも再会。

更に、友人である魔族のランゴンザレス、魔国国王であり、前世の恋人でもあるデズモンドとも再会した。

その後魔国へ向かったアレクシアは、数々の事件に巻き込まれながらも、ランゴンザレスの祖父であり、魔国の偉大なる大賢者ポーポトスや邪悪竜ウロボロスとも涙の再会を果たしたのだった。

そして前世の故郷であり、育ててくれた恩人がいる「竜の谷」へ向かったアレクシアは、危機的状况の大事件に巻き込まれてしまう。

竜族の子供達を人質に取って世界征服を企む、人族を嫌悪する竜族アランカルトが率いる反人族派と対峙することになったのだ。

前世でも可愛がってくれた、初代竜族族長であるミルキルズやオウメを助けて、事件を解決したアレクシア。

だが、アウラード大帝国へ帰ってきてすぐに、また皇宮内の不穏な空気を察知したアレクシア達一行の前に現れたのは……前世からの因縁の相手であった。

2 黒幕VSアレクシア

アレクシアの前世であるアリアナを追いつめ、魔国から追いやった人物——トリシア。

そのトリシアが転生したのが、アレクシアを亡き者にしようと暗躍しているエレノア・ヤノース公爵ではないか。

そんな話になり、ルシアードがロインに指示を出す。

「エレノア・ヤノースを今すぐ捕らえて連れてこい」

「その必要はないわ」

しかし廊下の奥から響く足音と共に、一人の女性が静かにこちらへ近付いてきた。頬を赤らめながら優雅に歩いてくるのは、件の女傑エレノア・ヤノース公爵だ。

前皇妃でありルシアードの母親であるプリシラの妹だ。

プリシラは息子のルシアードに近寄ろうともせず、傲慢で権力しか信じていないような人間だった。先帝が崩御された時に幽閉されたのだが、アレクシアを亡き者にしようと暗躍……していたはずだが、今ではすっかりアレクシアと仲良くなっていた。

そんなプリシラの妹であるエレノアは、ポーポトスの方へまっすぐと向かう。

「私も魔法を研究している身といたしましては、魔国の大賢者ポーポトス様にお会い出来たことは

この上なく光栄ですわ!!」

「ホホ！ 今のこの国に、ワシを知っている者がおるとはのう？」

「魔法を極めたい者でポーポトス様を知らない者なんていませんわ！ 是非ご指導をお願いしたいですわ！」

笑顔で話していたポーポトスだったが、エレノアの言葉を聞いた瞬間に顔色が変わる。

「ワシが指導するのは、昔も今もこの子だけじゃよ」

そう言っただけでアレクシアを指差すポーポトス。

「ポー爺！ 煽らないでくださいな！ トリシアは面倒くさいんでしゅから!!」

アレクシアがポーポトスに猛抗議をするがすでに遅く、エレノアは下を向きプルプルと怒りに震えていた。

そして怒りで魔力を暴走させ、彼女から噴き出したおぞましい黒い煙のようなモノが周りを襲い始めた。

アレクシアは急いで防御魔法を発動させようとしたが、次の瞬間には、そんな彼女を守るように強力すぎる無限層構造の防御魔法が張られた。

「む。アレクシアどこにいる!?」

自分の足元にいるのに愛娘アレクシアを探しているルシアード。

「アレクシア、吹き飛ばされていないか？」

無駄にキラキラした笑顔で失礼なことを言うデズモンド。

「小さいからな!!」

空気が読めないのかアレクシアの気にしていることをズバツと言うゼスト。

「もっと言い方ありましょね!?」

ルシアードにデズモンド、そしてゼストの最強トリオがアレクシアを守るように立っていて、エレノアを睨みつけていた。

ジーッ……ポーポトスとミルキルズはたった指一本で払いのけている。

五匹の子犬従魔達も丸く毛玉のようになりコロコロと転がりながら襲ってくる黒い煙を避けるという独特な防衛をしているが、半分は遊んでいるのだろう、とても楽しそうだ。

『『『逃げろー!!』』』』

だが、案の定あんこが方向を間違えて、何故か黒い煙の方に向かっていつてしまった。

もう少しで黒い煙に吞まれそうになった時、ヒョイとあんこを軽く抱き上げて、迫り来る黒い煙を手で軽々と弾き返す人物がいた。

「はあ……あなたは何をやっているんですか？」

『ありゃんかーと……ありがとー』

危機感がまるでないマイペースなあんこに呆れて溜め息が出るアランカルト。

アランカルトが違う意味で揉みくちやにされていたとき。

その盾にされたユウラは、ロインやローランド達も守るように防御魔法を張っている。

怒りで我を失っているエレノアがアレ

「トリシア……いや、今はエレノアじゃったか。お主は確かに魔法の才能はずば抜けていた」

「その才能に溺^{おぼ}れて他者を見下し、決して踏み入^いつてはいけない人体を使った実験を繰り返してい

見たこともない程のポーポトスの激しい怒りに、恐れ慄

そう言われたエレノアは、その血走つた目をアレクシアに戻した。

「卑しいでしゅと!？」
好き放題に言ってくるわ

エレノアに言

「そうやっていつも誰かに守られて

不敵に笑っているエレノアに、デズモンドが鋭い視線を向ける。

「……まさかお前が転生していたとはな。それに気になっていたんだが、その魔力は何だ？ トリシアの魔力じゃないな」

そして次のポーボトスの発言によって、エレノアの顔色が変わった。

「プリシラじやろう？」

顔を青くするエレノアを見ながら、アレクシアが首を傾げる。

「オババでしゅか？ 確か魔力を封印されていまちたが……まさか!？」

「そうじゃ。幼い頃には強力な魔力を持っていたが、ある時から一切魔力を使えなくなったと言っていたじやろう？」

ポーボトスとアレクシアの会話を聞いていたルシアードは、何やら考え込んでいた。

ちなみにロインやローランドは、アウラード大帝国の女傑として名高かったエレノアの変貌へんぼうぶりを見て、未だに咄然あざねとしたままだ。

「黙れ!! 私のこの屈辱は誰にも理解できないわ!! 最弱で醜い連中だと思っていた卑しい人族に………この私が………転生するなんて!!」

地団駄じだんだを踏みながら喚き散らすエレノアに、冷めた視線を向ける一同。

そんな緊迫した状況の中、気配を消してアレクシアの頭に乗っていた黒い小鳥——ウロボロスが

パタパタとエレノアの元へ飛んでいく。

「何なのよ、この鳥は!!」

自分を見透かすように見てくる正体不明の黒い小鳥に、何故か恐怖を感じるエレノア。

するとその小鳥が突然光り出して、次の瞬間には小鳥ではなく、小さな黒い竜がそこに姿を現した。

昔からよく知るあの黒い竜の気配に、エレノアはぶるぶると震え出す。

『久しいな、トリシア……いや今は人族のエレノアか』

「あ……邪悪竜ウロボロス……!! 何故……アリアナと一緒にいるのよ! あんた達は一体なんなの!? 仲が悪いんじゃないの……何で……ウロボロス……私を殺したのおおおお!!」

喚き散らすエレノアの、ウロボロスがトリシアを殺したという衝撃的な発言に驚きを隠せないアレクシア。

だが、他の者は驚くことなく異様な程に冷静だった。

「ウロボロしゅがトリシアを殺したでしゅと!？」

「そうよ!! ああ、あんたは何も知らないでこのうと冒険を続けていたんでしょねえ!？」

エレノアの言う通り、アレクシアはトリシアについて、昔、魔国の大罪人として処刑されたとか聞いていなかった。

アリアナや魔国の魔術師達への度重なる妨害行為や殺害未遂、そして魔国王族達に対する暗殺未遂、更には非人道的な実験、大量殺戮と数え切れない罪で投獄され処刑された。

ポーボトスやランゴンザレスからそう聞いていたので、まさかウロボロスが関わっているとは思っていなかったのだ。

「ウロボロしゅ……どうということなんでしゅか？」

アレクシアはパタパタと飛んでいるウロボロスの側まで行くと、自分が知らない真実を聞き出そうとした。

『こいつだけは許せなかった。馬鹿みたいな欲やプライドで散々お前を苦しめ、更にはこいつが一部の魔貴族と結託して……クーデターを起こさなければ……！』

ウロボロスの激しい怒りに、デズモンドも同じように怒りに震えていた。

ランゴンザレスやポーボトス、ステラ、ユウラといった魔国の面々も、皆が怒りの眼差しでエレノアを見ていた。

「ふん！ 人族の分際で魔王太子と婚約なんて、皆が許すわけないでしょ！ 馬鹿馬鹿しい！！」

馬鹿にしたように笑うエレノアに我慢が出来ずに、今すぐにも殺そうとするデズモンドだが、アレクシアに制止された。

「待つでしゅー！」

「アレクシア、止めるな！ こいつのせいで………！！」

「クーデターを止めるのに皆が精一杯だったんでしゅから！ それに、そのお陰で奇跡的に死人が出なかったんでしゅー！！」

「む。アレクシア、この女に苦勞させられたようだ。今はそうはさせないから安心しろ！！」

「本当に昔も今も胸糞悪い女だ！！」

アレクシアが必死に魔国組を抑えようとしているが、ルシアードやゼストまでもが怒りの参戦をしてきた。

ミルキルズも今はまだ黙って見ているが、目つきは厳しいままだ。五匹の子犬従魔もエレノアへ飛びかかるうと必死だが、アランカルトに止められていた。

「あらあら？ 本当に皆に愛されて守られて……そんな女にこの私が負けるとでも!?」

またもやエレノアが体からおぞましい黒い煙を噴き出しアレクシアへ襲わせる。

しかしウロボロスが目の前に立ちはだかり、煙を一瞬で消し去ってしまった。

「邪悪竜ウロボロス!! 邪魔をしないでちょうだい!! この女がいなくなれば全てが上手くいくのよ!!」

『黙れ!! アリアナを排除しようとクーデターを起こさせた張本人が!!』

アリアナとデズモンド魔王太子の婚姻話が出た当時、魔国民達は祝福していた。

その一方で一部の魔貴族達は、人族のアリアナが魔王妃になるのを快く思っていなかった。

そんな不満が溜まっていた魔貴族達にクーデターを起こさせたのは、その時すでに魔国で指名手配されていた大罪人トリシアだった。

トリシアが魔王都に入ったという情報は、魔国で多大なる権力を持つ貴族や英雄で構成されているグループ——四老会や、魔国王族の耳にすぐに入った。

彼らは早速、トリシアを捕らえるべく動き出したのだが、そのタイミングで、魔王都でクーデターが起こった。

彼女に唆された魔貴族達が、魔国民を人質に、アリアナの永久国外追放と魔王太子デズモンドとの婚姻の破棄を要求してきたのだ。

更に欲が出たのか、トリシアと共に魔国を乗っ取ろうとまでしていた。

魔国民を人質に取られて頭を抱える魔国王族や四老会、ランゴンザレスを近くで見ていたアリアナは、従魔達と魔瘴の森へ向かった。

「ウロボロス、お願いがあるのよ。あんたのあの宝石盗ませて？」

ウロボロスが大事にしている、破滅の秘宝と呼ばれる黒い宝石。

アリアナがそれを盗めば、ウロボロスは暴れ始める。

そうしたら、身内同士で争っている魔国の皆も、一致団結してウロボロスに対処してくれるだろう。

『はあ!? 今そんなこととして、本当にクーデターが止まるのか? 場合によっては、反アリアナ派が更に増長するだけだぞ!』

ウロボロスはアリアナの発言に呆れていた。

「……あんたは巻き込みたくなかったんだけど……私のせいでこんなことになっているの見たくないのよ。いつも揚げパンを一個おまけしてくれたおばちゃんや、魔国新聞をいつも買ってくれて追いかけてくるラジ坊、大工の親父や……皆が大好きなの」

ポツリポツリと話し出したアリアナ。

「なのに私のせいで傷ついて欲しくない。ならさあ……恨まれた方がよっぽどマシだわ!」

『お前……』

「あはは! 私は空気の読めない悪者のままこの国を出るわ! もう魔国に堂々と遊びに行けないのは寂しいけど……たまに会いに来るね」

ウロボロスが必死に説得するが、アリアナはもう固く決心しているようだった。

「これ以上私の大好きな人達が苦しむのはおかしいでしょう？ 私の大好きな人達が築いた国は絶対に守らないと！」

『このクーデターが仕組まれたものだって分かっているし、加担した魔貴族も何人かは捕らえた！あとはあの女を捕らえれば……お前の無実が証明されるんだ！ あと少しの辛抱なんだよ！』

アリアナの周りにいる従魔達も、心配そうに彼女を見ていた。

「ふふ……私ってせっかちだから待つていられないの！ だから一生のお願い！ 私の言う通りに手伝ってくれる？」

これ以上は何も言えずに、ウロボロスは宝石を渡すと、クーデターで混乱している魔王都に降り立ち怒ったフリをした。

そして皆が恐れ、デズモンドを中心として一致団結している内に、四老会が全ての魔貴族を捕らえることに成功した。

そして魔障の森で隠れて待つていたアリアナと話しているところを、アーウィング魔公爵家の息子ユウラに見られたが、威圧しておいたから大丈夫だろう。

そしてアリアナは、従魔達と共に魔国を去った。

そのあとすぐに、ウロボロスの所へデズモンドが追いかけてきたが、アリアナの立役には間に合

わなかった。

「ウロボロスよ、アリアナは大丈夫でしたか？ 泣いていませんか？」

『お前……分かっていたのか？』

「ずっとアリアナを見てきたんですよ、分からない方が難しいです」

そう言って悲しそうに笑うデズモンド。

『あいつはこの国が大好きなんだ。それと同じくらいにお前のことも大好きなんだよ……だからお前を選ばなかったんだ』

ウロボロスの言葉を聞いたデズモンドは、膝から崩れ落ちて叫ぶように泣いた。泣き続けた。

「アリアナ……アリアナ……それでも俺はお前を愛しているんだ!! お前を苦しめることになったとしても！ この国を捨てても良いとさえ思った！ アリアナ……うう………」

ウロボロスが泣き続けるデズモンドに声をかけようとした時だった。

こちらに歩いてくるおぞましい気配を感じて、警戒を強める。

「あら？ 魔王太子であろう者が情けない！ あんな女に誑かされて……ふっ」

クーデターの黒幕であり、全ての元凶であるトリシアが不気味に嗤いながら近づいてきたのだった。

森の奥からゆっくりとこちらに歩いてくるトリシアを見て、顔色が変わるデズモンドとウロボ



ロス。

そして同じタイミングで、トリシアが出てきたのと反対側から、魔国の偉大な大賢者ポーポトスとその孫であるランゴンザレスが現れた。

「あら、一足遅かったわね？ アリアナはこの国を出て行っただわよ！ アハハハ!!」

「デメェ!!」

我を忘れてトリシアに魔法で攻撃を仕掛けようとするランゴンザレスだが、突如、これまでに感じたことのないような凄まじい魔力が皆を襲う。

その魔力の持ち主は——ウロボロスだった。

「ホホ……これがお主の本当の力なのかい？」

ポーポトスでも立っていられずに膝をついてしまった。ランゴンザレスやデズモンドは押し潰されそうな力に耐えられず、その場に崩れ落ちる。

「なんなの……これが……邪悪竜の力だっていうの!? ……………うう……ぎゃあああー」

ウロボロスの魔力を一身に受けているトリシアは、激しい苦痛に襲われ、吐血し苦しみもがいていた。

『全身の臓器を破壊してやる……そして死にかけたら、また回復させての繰り返しだ。お前にはそれでも足りないがな!』

そう言って、息も絶え絶えなトリシアへ回復魔法をかけるウロボロス。

「くっ……何故なの！ あなたはアリアナの天敵だったはずよ!?」

「お前は本当に何も分かっていないんだな。まあ真実を知っているのはごく一部の者達だけだから仕方がないが……そもそも、ウロボロスをこの地へ導いたのはアリアナだ」

デズモンドの衝撃的な発言にトリシアは驚愕する。

「何ですって!? だって、邪悪竜ウロボロスはデイルズ様が召喚したのよ!? 実際に見ていた者だって多数いたわ!!」

「ああ、それは私の手違いで、デイルズ様には犠牲になってもらったのよ。まさか大きくなるなんて思っていなかったんだもの!!」

ランゴンザレスが皮肉を込めてウロボロスを見ると、彼はスッと目を逸らした。

ランゴンザレスが言っているのは、アリアナがウロボロスを連れてきた直後のこと。

ウロボロスは魔王国に着くなり、小さくしていた身体を大きくして、正体を皆にばらしてしまったのだ。それを見た国民は、すっかりデイルズが召喚したものだと思ってしまうていた。

「そんな……あの女がウロボロスを……何なのよ！ 何なのよ!」

怒りと混乱で頭を掻きむしりながら大声で叫んでいるトリシアに、皆の冷めた視線が突き刺さる。「お前はやりすぎたんじゃ！ アリアナをどれだけ傷つけようとしても、お前はあやつには一生勝

てないわい!」

ポーボトスのいつもの穏やかな雰囲気はどこにもなく、怒りを必死に抑えているようだった。

「そうよ！ 今回の件は……絶対に許さないわ！ あんたはアリアナの決心と勇気を奪い、踏み躪った!」

ランゴンザレスは涙を流しながら、トリシアに吐き捨てた。

アリアナはデズモンドを、彼がアリアナを愛するのと同じくらい愛していた。

だがデズモンドは長命種の魔族であり、アリアナは短命種の人族。

そのためアリアナは、デズモンドの告白を軽く受け流していた。

そんな時にデズモンドの婚姻話が始めて、それを聞いたアリアナは上手く笑えなかった。上手く笑う練習をしたのに何故だろうと、ランゴンザレスの前で泣いてさえた。

『もう！ 寿命とかそんなのは何も考えないで結婚しちゃいなさいよ！ デズモンド様もあんたもお互い物凄く好きなくせに！ あんたが先にお婆ちゃんになってもデズモンド様は何も変わらないわ!』

『……………。でも先に私が死んだらあいつは耐えられるかな……。すぐに私を追ってきそうだからさ……怖いんだよね。死んでほしくないから……』

そう言って下を向くアリアナだが、そんな彼女に近寄ってくる人物がいた。

『お前がそう望むなら俺は死なない。それは想像以上に苦痛だが、お前との思い出があるから耐える。耐えてみせる。だから俺が死ぬまで旅になんか行かないで、ちゃんと待っててくれよ?』

そう言ったのは、デズモンドだった。

その言葉に、アリアナは何も言わずにただただ頷いたのだった。

アリアナが決心するまでには、物凄い葛藤があった。

それはデズモンドも同じで、愛する人が先に逝くことになる悲しみと不安は計り知れない。

だが、二人は勇気を出して、結婚を決心した。

なのにトリシアという欲深く傲慢な女の独りよがりの嫉妬と恨みで、二人の勇気と決心が踏み躪られてしまったのだ。

皆が涙を流し、悲しみ、悔しがるのも仕方ないことだった。

「アリアナが偉大なる魔国の魔王太子妃になるなんて考えられないわ!! 弱くて醜い人族の分際で魔国の魔王太子妃になるなんて、絶対に許さないわ!! まあもうそれは叶わないわね! アハハハ!! 馬鹿な女!!」

馬鹿にしたように笑うトリシアだったが、またあの耐え難い苦しみが身体中を襲う。

「うがああああー!! いだい……ぎゃああー!!」

『あいつが馬鹿なら、お前は何なんだ? 救いようがない醜い化け物だ! 卑怯な手を使わずに

正々堂々とあいつに向き合ったことはあるか!? 今までも逃げ隠れしていたんだろう? 最後のあ

いつの顔を見に来たのか? どうだった? 悲しそうだったか!』

ウロボロスの怒りは凄まじく、周りも動けない。

トリシアは瀕死だったが、ウロボロスによってまたしても回復していく。

「……………悔しい! 何であの女ばかり気に入られて好かれて……………私の方が優秀なのに……………デイルズ様もポーポトス様も、私を見ないであの女を褒めてばかり!!」

地面を叩いて悔しがるトリシアだが、賛同する者など一人もない。

そんな彼女の頭にコツンと何かが当たったので顔を上げると、それは小さな石ころだった。

「お前のせいでアリーがいなくなっちゃったじゃないか!!」

声がした方に顔を向ければ、そこには小さな男の子がいて、泣きながらトリシアに石ころを投げ続けていた。

「…………ラジカ」

デズモンドがそう小さく名を呼ぶ。

デズモンドがアリアナに連れられてお忍びで魔王都に繰り出した時、いつも二人に付き纏い、新聞を買わせようとするヤンチャ坊主だ。

「アリーはいつも意地悪だったけど……………本当は優しく……………大好きだったんだ! アリーは悪いこ

としてない！ うわーん!!」

「そうだよ！ あの子は優しい子なんだ！」

ラジ坊の後ろから、たくさんの魔国民が怒りの表情でこちらに向かってくる。

「……アリアナ……お前は魔国を好きだと言ってくれた。だが見てみる……魔国民だって俺達だってお前のことが大好きなんだ……」

デズモンドはこの光景を見て涙を流した。

「何なのよ……平民風情が偉そうに私に説教するつもり!?」

トリシアは続々と集まってくる魔国民達を見て、怒りを爆発させる。

ウロボロスは魔国民に被害が出ないようにとつさに魔力を抑えたので、デズモンド達も動けるようになってる。

なのでトリシアから魔国民を守るように先頭に立ち、彼女の攻撃に備えた。

「お前のせいでアリアナが悪者になっちゃったじゃないか！ もう魔国に来なく……うわーん!!」

我慢の限界だったのか、大きな声で泣き出してしまったラジ坊。

「あんな優しい子を……何が天才だよ！ あんたのやったことは魔国の恥さ！」

泣いてしまったラジ坊を抱きしめながら、トリシアに怒りを爆発させる恰幅の良い女性。

自分の作った揚げパンを嬉しそうに頬張るアリアナを、彼女はいつも見守ってきたのだ。

彼女の発言を皮切りに、周りの魔国民達もトリシアに対して怒りをぶつけ始めた。

「黙れ！ お前達こそ魔国の恥よ！ 人族に肩入れする者はこの国に要らないわ！」

トリシアがそう吐き捨てるように言うと、彼女の体から黒い煙が先程よりも勢いよく噴き出して、国民を狙い始めた。

だがデズモンドやランゴンザレス、そしてポーボトスやウロボロスが、国民を守るように立ちはだかる。

ポーボトスやランゴンザレスは強力な防御壁を国民がいる一帯に作り出し、デズモンドはトリシアを拘束しようと動き出す。

しかしそれよりも先に、ウロボロスが動いた。

先程と同じように、トリシアを魔力で包んだのだ。

「ぎゃあああー!!」

トリシアは激痛でもがき苦しみ、息も絶え絶えになってきたところで、ウロボロスによって回復させられた。

まさに生き地獄だ。

そんな悲惨な状況にもかかわらず、周りはトリシアへ冷めた視線を送っていた。

トリシアが動けないでいる中、ポーポトスがラジ坊達の元へ向かう。

「お主がラジ坊か、アリアナが随分と可愛がついてみたいじゃのう」

「……すん……アリアナは孤児の俺に、新聞配達の仕事を紹介してくれたんだ……あと金の稼ぎ方も……すん……」

「最後のは聞かなかったことにするわい……。どうしてここが分かったんじゃ？ それに誰が真実をお主達に伝えたんじゃ？ 動かした者がいるんじやろう？」

ポーポトスの問いかけにラジ坊は後ろを振り返り、ある人物を指差した。

それと同時に、他の国民も振り返り、一斉に跪いた。

そこには黒ずくめの人物が立っていた。

その人物の気配は今まで感じなかったが、ポーポトスらに気付かれたと同時に解放したのだ。

「いつ魔国に戻ったんじゃ？ さすがに当分は放浪禁止じゃぞ！」

ポーポトスがその人物に小言を言う横では、ランゴンザレスや魔王太子であるデズモンドまでもが跪いていた。

「ハハハ！ アリアナとデズモンドの婚姻が決まったと聞いて、居ても立ってもいらなくて帰ってきたんじゃが、とんでもないことをしたのう……トリシア!!」

黒いフードの下から現れたのは、現魔国王デルタスや魔王太子デズモンドによく似た顔立ち

だった。

見た目は四十代後半くらいで、白髪が少し混ざった群青色の髪を短く切り揃え、紫色の瞳が印象的な、ちよい悪風のイケオジだ。

デズモンド達と違うのは、この人物が屈強で筋骨隆々の大柄な体型であることだ。あまりにも大きくて、昔はアリアナやデズモンド、ランゴンザレスやステラに遊具扱いされていたほどだった。

姿を現したこの人物の正体は、偉大なる魔国初代国王陛下、デイルズであった。

そんな彼は、恐ろしい程の怒りを込めた視線をトリシアへ向けた。

「デルタスからの文を読んでワシはどんなに喜んだか……目に入れても痛くないアリアナと孫のデズモンドが結婚する。じゃから一番に祝おうと急いで戻ったらクーデター？ アリアナを追放？ ふざけたことをしておって!!」

デイルズの怒りで大地が揺れた。

それを一身に受けたトリシアは、恐ろしさのあまり震えて動けない。

こんなに激昂するデイルズを、トリシアは見たことがなかった。

「デイルズ様……あのアリアナは我々魔国民を騙しているのです！ 皆は何故、あの人族をそんなに庇うのよ！ 我々偉大なる魔国民と同等と思っているのよ？ 弱いくせに媚を売るのは上手い男好きの……ぎいあああー」

トリシアが話し終える前に、ウロボロスの怒りが爆発した。

『このまま姿を現さないで逃げ隠れていれば良かったのにな！ お前の得意技だろう？』

吐血して息も絶え絶えのトリシアを魔法で厳重に拘束したウロボロスは、デイルズ達の方を振り向く。

『こいつは俺が預かる！ 文句はあるか!?』

ウロボロスの凄まじい迫力に、皆が跪いた。

『罰が終わった』らこれを取りに来い』

ウロボロスは冷酷な表情でトリシアを見下ろすと、叫び助けを求める彼女を無情にも魔法で浮かせ、森の奥へ消えていった。

残された者達は心中複雑だが、あの激昂したウロボロスに意見を言える状況ではなかった。

『デイルズ様……アリアナはもう魔国に来ないかな……』

『ラジ坊、あの子が自分からやって来るまで待つてくれんか？ 必ず笑って会いに来てくれる』

デイルズに抱っこされたラジ坊は、少しの沈黙の後、頷いたのだった。

†

「う……うわーん……シアは馬鹿ちゃんでしゅ……ラジ坊……ごめんでしゅ……うわーん！」

真実を聞いたアレクシアは泣き崩れた。

魔国の皆を分かってなかったのは、自分の方だった。

「ウロボロしゅ……みんな……馬鹿んなシアを……うわーん」

今までにないくらい大泣きする愛娘を、ルシアードとゼストは戸惑いながらも優しく抱きしめた。

『お前に振り回されるのは皆慣れているからな！ 今度会いに行つてやれ。皆驚いて腰を抜かすぞ！』

アレクシアは、そう言つて優しく笑うウロボロスの元へ駆けていつて、思いっきり抱きしめた。

「ウロボロしゅ……辛いことをさせてごめんねえ……ごめんねえ……」

抱きしめられたウロボロスは、アレクシアの言葉にポロポロと涙を流した。

「何泣いているのよ!? 私がこの邪悪竜にされた仕打ちがどんなに酷かったか、あんたに分かる!?」

ウロボロスとお互いを思つて泣いていたアレクシアを見たエレノアは、前世で自分のされた仕打ちを思い出して怒っている。

「お前は全然変わらないな。人を見下し、傲慢で卑怯、自意識過剰でプライドが異常に高いと良いところが一つもない」

デズモンドが自分勝手なエレノアを、憎しみのこもった目で睨み付けながら吐き捨てた。

しかしエレノアはめげない。

「ふん！ 今世でアリアナと再会出来て良かったですわね？ でも絶対に婚姻は許さないわ！ 我がヤノース公爵家の力で……」

「ヤノースだか何だか知らないが、もうお前の勝手にはさせないから覚悟しろよ？ それに聞きたいが、今のお前に何が出来る？」

お互いに睨み合い、今にもエレノアに襲いかかる勢いのデズモンド。昔の出来事もあり相当な怒りをぶつけている。

その横に並ぶのは、ランゴンザレスとステラ、それにユウラだった。

特にユウラは魔法省長官として、トリシアのことが許せなかった。

ユウラも幼い頃から、魔法の才能が飛び抜けていた。そんなユウラは、魔法省からスカウト——それも史上最年少での魔法省入りを果たし、注目の人物になった。

だが、それが面白くなかったのがトリシアだ。ユウラが入るまでは、彼女が史上最年少入省の天才ともてはやされていたからだ。

そんなわけで、ユウラはトリシアに執拗に嫌がらせをされたり暴言を吐かれたりしていた。

もっとも、気にもしていなかったが。どんな女性も姉のステラより酷い人はいないと思っていたからだ。

だが、トリシアはおぞましい人体実験を繰り返していたことが明るみに出て、魔法省をクビになった。

加えて、拘束される直前に仲間だった魔法省の者を殺害して逃亡したのだ。

更にアリアナに対する惨い仕打ちや魔王族への裏切り行為で、魔国の敵となったトリシア。魔法を悪用して大事な者達を傷つける彼女を、ユウラは許せなかったのだ。

「あんたに魔法を使う資格なんてない！ 魔法省の仲間達をお前は殺しただろう！」

「ああ、ユウラ・アーウィング。天才ともてはやされて勘違いしていたアーウィング魔公爵家のお坊ちゃんじゃない」

自分を睨むユウラを、エレノアは小馬鹿にしたように笑った。

「仲間ですって？ アハハハ！ あんないくらでもいる使い捨てが仲間な訳ないでしょう？」

「お前——!!」

ユウラからはいつものふざけた雰囲気は一切なくなり、物凄い殺気を発しながらエレノアに攻撃を仕掛ける。

【獄炎】

マグマのような沸々とした炎をエレノアに向かって放とうとしたユウラだが、その炎を背後にいたポーポトスが瞬時に消してしまう。

「ポーポトス様!」

「馬鹿ちゃん! こは魔国ではないのだぞ!? 他国でこんな最上級魔法を使うでないわ!」

「こは人族の国だ。我々は平気だが周りが犠牲になるぞ? そんなやり方はこの者と同じじゃぞ!」

ポーポトスに加えて、ミルキルズもそう言つて首を横に振る。

二人に叱られて少しだけ冷静になったユウラは、その場に崩れ落ちた。

一方でロインやローランドは魔法省長官であるユウラの力に驚いていた。やはり魔国の力は桁違^{けた}いだと改めて気付かされたのだ。

「ふふふ。弱い人族なんて殺されても仕方がないのに、相変わらずお優しいですわね、ポーポトス様?」

「え? わしはー?」

そう言いながらうつとりとポーポトスを見つめるエレノアへ、無視されたミルキルズが猛抗議する。

「む。エレノア、お前を皇女暗殺未遂で拘束する」

ルシアードがそう言つて、怒りを露わにエレノアへ近づこうとした時だった。

「あら、本当に私を拘束して良いのかしら?」

あまりに余裕のあるエレノアに、不審を抱く一同。ロインもエレノアを怪しんでいる。

「何か怪しいでしゅね? 一体何を企んでるんでしゅか!!」

アレクシアが頭にウロボロスを乗せて、エレノアに近づく。

「あんたが私の目の前にまた現れなければ、こうはしなかったわよ!」

「そういえば、シアは昔の魔力を持つて生まれまちたけど、トリ……エレノアからは昔の魔力を感じなかったでしゅね?」

核心をついたアレクシアとエレノアは睨み合っていたが、急にエレノアが不気味に笑つたのだった。

3 アレクシアの危機

「何笑つてんでしゅか! やんのかこらあでしゅ!!」

アレクシアが五匹の子犬従魔とオラオラーと言いながらエレノアを威嚇^{いかく}する。

——その異変にいち早く気付いたのは、ミルキルズとポーポトスだった。

「……プリシラ殿の魔力が封印されていた……彼女の妹がエレノア……魔力を感じない……そんなまさか!」

「これは……アレクシア! 早くそこから離れるんじゃ!!」

ポーボトスとミルキルズが、アレクシアを必死で呼び戻そうとする。

嫌な予感がしたルシアードやゼスト、それにデズモンドもアレクシアを無理矢理引っ張ろうと手を伸ばした。

だが全てが遅すぎた。

皆の目の前で、アレクシアが苦しそうに吐血して倒れてしまったのだ。

ウロボロスでさえも、何が起ったのか分からず、子犬従魔達も驚いて固まってしまった。

ランゴンザレスも一瞬のことで動けず、ステラは呆然と**ぼうぜん**とその瞬間を見ているしかなかった。ユウラは何やら叫んでいるが、皆の耳には届かない。

ロインとローランドも信じられない、信じたくない光景に足が震え動けない。

信じられない光景に皆が動けない中で、いち早く動いたのは、今まで傍観していたアランカルトだった。

「何をやっているんですか!! 私には別に構いませんが、あんた達はこれが死んでも良いんですか!!」

アランカルトの叫びに、ルシアードやゼストが我に返り、倒れているアレクシアを抱きかかえた。デズモンドも手足の震えが止まらないが、懸命に動き出す。

ロインとローランドはルシアード達に抱えられたアレクシアに急いで駆け寄った。

「お主……覚悟しろ!」

ポーボトスが笑うエレノアを、今度こそ拘束しようとする。

「私を拘束しても良いけど、苦しむのはアレクシアよ?」

不敵に笑うエレノアに、ミルキルズやウロボロスの心が怒りで荒んでいく。

彼らの怒りで、アウラード大帝国は昼にもかかわらず空は闇に包まれていった。

「どういことなんだ! ああ……アレクシア! しっかりしろ!」

ルシアードは口から血を流して苦しむ愛娘を抱えながら、何やら事情を知っているであろうポーボトスやミルキルズに説明を求めるように視線を送る。

ミルキルズはそこで冷静になり、大事なひ孫であるアレクシアの元へ駆け寄った。

怒りで本当に邪竜になりそうな自分を抑え、ウロボロスはパタパタとアレクシアの元へ行き、エレノアの攻撃に備えている。

「まさか究極の呪術を完成させていたとは! これはどんな相手でも意のままに操ることが出来る恐ろしいものじゃが……トリシアが死んで決して完成することがないと思っておった」

頭を抱えてしまったポーボトスを見て、勝ち誇ったように笑うエレノア。

ローランドが怒りで飛びかろうとするのを必死に止めるロインだが、彼も怒り心頭だった。

「私もまさか、記憶を持ったまま生まれてくるとは思わなかったですわ。でも問題がありました

の！　まずは人族という下等なものに転生してしまったこと、そしてもう一つ……魔力が低レベルで生まれてきてしまったことよ!!」

エレノア・ヤノースは、ヤノース公爵家の次女として生まれた。

ヤノース公爵家は魔法に長けていた一族として、アウラード皇族を代々支えてきた名門貴族だった。

そこへ魔力低レベルで生まれてきてしまったエレノアを、この家族は何も言わずに受け入れ、心から愛してくれた。

しかし彼女にとってそれは、この上ない屈辱だった。

(この私が魔力低レベルですって!?)

更に彼女のプライドを傷つけたのが、姉であるプリシラの存在だった。

プリシラは人族ではトップクラスの魔力量を持ち、全属性の魔法が使える天才だった。

加えて、可憐で皆に優しいプリシラは、次期皇帝であるウルシード皇太子の婚約者候補だった。

幸いなことに、エレノアには昔の研究やおぞましい呪術の記憶が鮮明に残っていた。なので前世で完成出来なかった呪術の研究をするために部屋に引き籠もり、血を吐くような努力で完成させたのだ。

そして憎きプリシラを上手く部屋に誘い込み、究極呪術【鎖】の実験台になってもらった。

この呪術は人を完璧に操り、そして力を奪うものだった。そして最終的には意識を完璧に乗っ取り、まさにエレノアの操り人形になってしまうものだ。

「殺せといえば愛する者でも平然と殺し、死ぬといえば簡単に死ぬ！　本当に面白いわよね!!」

そう言って高々と笑うエレノア。

「……その母上にした実験は、成功したのか？」

笑うエレノアを強く睨み付けるのはルシアードだ。

「ええ。あの膨大な魔力は姉が使えないように封印して、私が少しずつ頂いているわ！　家族や姉本人は急に魔力がなくなったことに驚いていたけど、原因は分からないままだったわね！」

ある日を境に、プリシラの魔力が急になくなった。

そしてそれと同時に、彼女の優しく慈悲深かった性格も急に変わってしまった。

残酷で傲慢な令嬢へと変貌したことに、周りは戸惑うばかりだったのだが、その原因はエレノアにあったのだ。

「……母上をずっと操っているのか？」

「ええ！　ああ、幼いあなたに毒を盛ったのも、冷たくしていたのも、私が操っていたからよ？　面白いことに、深い心の奥底では未だに自身の意識が存在するから、自分の息子を殺そうとしたことも知っているはずよ？　可哀想に……もし今プリシラを解放したらどうなるかしら？　精神崩壊

の上に、自ら死を選ぶかも？」

エレノアの残酷なやり方に怒りを爆発させたルシードは、瞬間的に彼女へ攻撃を仕掛けた。

「やめるんじや!!」

間一髪でポーポトスが止めたが、溢れ出た魔力が動かなかったエレノアの頬を掠めて血が流れ落ちた。

すると、倒れたままのアレクシアの頬からも血が流れ出ていた。

「アレクシアとは心も体も一心同体なのよ？ 私死ねばアレクシアも死ぬのよ!! アハハハ！馬鹿な連中！ あんた達がアリアナの死で腑抜けていた時も研究を続けていた私の勝ちよ!!」

これに衝撃を受けた一同を見て嘲笑うエレノア。

「エレノアの研究は、プリシラ殿の犠牲のもと完成してしまったんじや……」

崩れ落ちたポーポトスを支えるランゴンザレスだが、彼も他の皆も顔面蒼白だった。

「さて、アレクシアをどうしてくれましょう？ 体中を切り刻んでは再生させてを繰り返しましょうか？ 私も痛いけど……それ以上にアレクシアに苦痛を与えるところをあんた達に見せることができるのは、研究した甲斐があったというものだわ!!」

恍惚の表情でそう叫ぶエレノアを見て、皆に絶望感が漂い始めた。

デズモンドやゼストは何か方法がないか必死に考え、アランカルトは泣く子犬達を宥めていた。

ステラはアレクシアの死を考えてしまい恐怖で動けず、ユウラはこの最強の呪術を解く方法を考えていた。だが複雑な術式に加え、この呪術を解こうとする者にも呪術がかかる仕組みになっていた。

「この呪術を解ける者なんて、誰もいないのよ!! 最強であるはずのポーポトス様も竜族でさえも！ アハハハ！ 遂に復讐の時よ!!」

なす術がない一同だったが、ずっと黙ったままのミルキルズとウロボロスだけは違った。

彼らからは、焦りや怒りという感情が何故か感じ取れない。

エレノアはそんな黙ったままのミルキルズとウロボロスを不審に思い、一步、また一步と彼らに近づいていく。

「あなた達、この子がどうなっても良いのかしら？」

いつのまにか手に持ったナイフで自身の手首を切ろうとするエレノアだが、無反応のミルキルズ達に苛立ち始めた。

「何なのよ！ 本当はアレクシアがどうなっても良いのね!？」

そう言うと、エレノアは思いつきり自分の太ももをナイフで刺した。

「やめろー!!」

ルシードやデズモンド、ゼストが叫んだ。だが、倒れているアレクシアの小さな脚からは血が

滲^{にじ}んでこなかった。

4 エレノアの誤算

「……どうしたこと!?　なんで傷付いていないの!」

驚きながら半狂乱で自らの脚を刺し続けるエレノアだが、アレクシアは無傷のままだった。血塗れになりながらも事態を呑み込めないエレノアは呆然と立ち尽くす。

すると、ルシアードに大事そうに抱えられていたアレクシアの閉^まじていた^ま瞼^{まなこ}が開いていく。

「はい!　シア復活——!　ウオー——でしゅ!!」

起き上がり雄叫^{おたけ}びを上げるアレクシアを見たが、受け入れられないエレノアは呆然としたままだ。「みんな、迫真の演技でちたよ!　仕事クビになったら演者になれましゅよ!」

立ち上がったアレクシアの元に駆け寄る、五匹の子犬從魔達やウロボロス。

『お前が一番迫真の演技すぎだ!　その吐血は何なんだよ!　聞いてなかったから驚いたぞ!』

ウロボロスの言葉に、皆が頷きながら元氣いっぱいのアレクシアに近づいていく中で、何故か一人だけ元氣がないルシアードがいた。

「ウロボロスとミル爺は、迫真とはいいましえんが、もう少し感情を……」

ウロボロスやミルキルズに文句を言おうとしたアレクシアだが、父親であるルシアードの様子が

おかしいことに気付いた。

「父上、どうちたんでしゅか?」

「アレクシア、お前の頬に傷を付けてしまった……」

そう言って落ち込むルシアードは、愛しの娘を思いっきり抱きしめた。

「……………。こんな傷はすぐに治りましゅから大丈夫でしゅよ!」

そう、術が効いていないとバレないように、エレノアの頬に傷が付いたと同時に、アレクシアもバレないようにと瞬時に傷を付けたのだった。

今はもう傷を治したが、ルシアードは自分のせいで娘を傷つけてしまったというショックから立ち直れていないのだった。

「腹に風穴を開けられてたらシアは今頃お陀^だ仏^{ぶつ}でちたけど!!　それに、シアは安心しました。父上にもまだプリシラオババを思う気持ちがあつたんでしゅから!」

アレクシアはそう言いながらルシアードを励ましていたが、何故かそんなアレクシアに周りの皆から抗議が殺到した。

「ちよつとあんた!!　あの大量の吐血は何よ!!　エレノアの術で苦しむ演技だけだったはずでしゅう!」

ランゴンザレスの意見に皆が強く頷いていた。

『主のおたんこなしゅー!! うわーん!!』

白玉が泣きながらアレクシアをポカポカと叩いている。

『酷いでしゅよー! 血がいっぱい出てまちたー!!』

黒蜜も泣きながらアレクシアをポカポカと叩いている。

『うわーん! おたんこなしゅー!!』

みたらしもアレクシアに抱きついて泣いている。きなことあんこもアレクシアに抱きつこうとしたが、何故かくんくんと匂いを嗅ぎ始めた。

泣いていた白玉や黒蜜、みたらしも何かを感じたのか、アレクシアをくんくんと嗅ぎ始めた。

五匹がアレクシアをくんくんとしつこいくらい嗅いでいるので、皆もアレクシアに近寄り匂いを嗅ぎ始めた。

「何でしゅか! シアが臭い人みたいでしゅよ!! お風呂は毎日入ってましゅー!!」

「お前……まさかこの血……アクロの実を使ったのか?」

「そうでしゅよ! 甘くておいちいから勿体なかったでしゅ……少し飲んじやいまちた!!」

ゼストの呆れた声にアレクシアはざらりと答えた。アクロの実とは、真つ赤な果実で食べると甘くて美味しい世界中で愛される、人気のある果物だ。

「アレクシアはアクロの実が好きなのか?」

「昔は甘くて苦手でちたが、今は大好きでしゅ」

デズモンドはそれを聞いて、何故か忙しくメモしていた。

「どういうことよ!! ありえないわ!! ありえない……ありえない!! 何で術が効いていないのよ!!」

ほのぼのした目の前の光景が信じられず茫然としていたエレノアだったが、ピンピンしているアレクシアを見て怒りを爆発させた。

「不思議でしゅか? ……エレノア、オババを利用してシアの髪を手に入れてまちたよね?」

五匹に囲まれながらも、エレノアの元へよちよちと不敵に笑い歩いていくアレクシア。

「まあシアも気付かなかったんでしゅが、ポポ爺が気付いてくれまちた!」

「プリシラに実際に会って見たが、話に聞いていた邪悪さがなく、孫を気に入っているようなあの態度がどうも気になってのう?」

アレクシアを狙った黒幕と思えない態度を不審に感じたポーポトスは、プリシラが隙を見てアレクシアの髪を抜いていたのを見逃さなかった。

「加えて、エレノアの話をした時に、妙に褒めておったろう? 話も微妙にかみ合っていないかったのう……本当に昔から詰めが甘いんじゃないよ。魔力も封印されているし、それでもしやと考えたのじゃ」